建築・まちづくりから生活文化を探求する情報誌［リクシル・アイ］

LIXIL eye

20
OCTOBER
2019

特集 建築のまちを旅する 08

信濃追分・軽井沢

立原道造が愛した浅間山麓で「田園的建築観」を想う

OCTOBER 2019
no.20

LIXIL eye

［リクシル・アイ］

表紙の写真

〈堀辰雄1412番山荘〉外観

設計｜不詳

昭和初期に活躍した小説家の堀辰雄が旧軽井沢で、30代後半から40代前半にかけての4年間に使っていた別荘。1985（昭和60）年に「軽井沢高原文庫」の敷地内に移築された。軽井沢を舞台とする堀の小説『美しい村』に登場し、居間側に張り出したベランダで夫人とともに写る写真も残る。アメリカのバンガロー形式で、柿葺きの屋根（当時）、杉皮張りの壁、白樺の枝を用いたベランダ手すりという素朴なつくりを堀は愛した。堀はこの別荘での生活を楽しんだあと、肺結核の悪化により追分に居を移す

［写真：石田 篤］

左写真

〈室生犀星記念館〉離れ

設計｜不詳

詩人で小説家の室生犀星は1931（昭和6）年に建てた旧軽井沢の別荘で、亡くなる前年までの30年間、毎夏を過ごした。写真は離れの内部で、この離れは室生が大工に指示し、古い田舎家を取り壊した際の廃材でつくられた。天井や一部の柱が新しいのは、腐朽により取り替えたため。正面の奥に見えるのは浅間石を積んだ石垣。浅間石は浅間山が噴火した際に流れ出た溶岩が堆積した火山岩で、軽井沢では古くから外構や擁壁に使われてきた。離れは泊まり客の寝室として利用され、立原道造も泊まったという

［写真：石田 篤］

LIXIL eye no.20
2019年10月20日発行

発行｜株式会社LIXIL
編集発行人｜早川氏幸
LIXILジャパンカンパニー
TH統括部
〒100-6007
東京都千代田区霞が関3-2-5
霞が関ビルディング7階
Tel: 03-6273-3635
Fax: 03-6273-3742
制作｜株式会社フリックスタジオ
デザイン｜株式会社ラボラトリーズ
印刷｜竹田印刷株式会社

＊本記事の無断転載を禁じます
＊本文中の敬称は省略させていただきました

次号『LIXIL eye』no.21は、
2020年2月発行予定です。

『LIXIL eye』のバックナンバーは
インターネットでご覧いただけます。
http://www.biz-lixil.com/column/lixileye/

CONTENTS

特集

04 **建築のまちを旅する｜08**
信濃追分・軽井沢

06 **テーマ1**
立原道造が愛した浅間山麓で「田園的建築観」を想う
ナビゲーター｜種田元晴

10 隠れ家プロジェクト 小さな小屋／追分の山荘／堀辰雄1412番山荘／室生犀星記念館

14 **テーマ2**
地域にとって大切な建物の価値を
「ブルー・プラーク」で後世に伝える

16 信濃追分・軽井沢建築めぐり

22 **住宅クロスレビュー｜08**
寒地住宅
圓山彬雄「高柳邸」×**青木弘司**「伊達の家」

32 **建築家の〈遺作〉｜05**
菊竹清訓「愛・地球博 グローバル・ループ」
談｜原田鎮郎

36 **新世代・事務所訪問｜08**
dot architects
ナビゲーター｜門脇耕三

44 **構造家の新発想｜08**
木材の可能性を追求する
山田憲明

48 **触覚デザイン｜05**
吉阪隆正のドアハンドル
ナビゲーター｜笠原一人

52 **土木のランドスケープ｜08**
木野部海岸 低天端幅広消波堤
ナビゲーター・文｜八馬 智

58 **Design＋Technique**
旧前田家本邸 洋館保存整備工事

62 **TOPICS**
LIXILビジネス情報サイトについて
文｜LIXILビジネス情報サイト事務局

65 **INFORMATION**
LIXILからのご案内／展覧会+イベント／LIXIL出版 新刊案内

68 **紙上の建築｜08**
超-転用ダイアグラム
橋本圭央（コスモポリタン／ワークショップ）

特集 建築のまちを旅する 08

信濃追分・軽井沢

外国人宣教師によって見出された歴史的避暑地・軽井沢は名建築の宝庫だ。
特に別荘と宿泊施設は幅広い時代の代表作が点在する。
各界の人物がこの地に魅せられてきた結果だ。もちろん建築家も大きな関心を寄せてきた。
そのひとり、戦前にここを訪れその魅力にとりつかれ、
理想の地をつくろうとした立原道造の目を通して軽井沢を見てみよう。
彼が惹かれていったのは、開発の進む旧軽井沢ではなく、浅間山により近い信濃追分だった。
同時期の文士も着目したその地の魅力を確かめにいこう。

詩人であり建築家でもある立原道造は、東京帝国大学建築学科在学中から亡くなる前年まで、浅間山麓の信濃追分を毎年訪れ、「油屋」という旅館を定宿にしていた。油屋は1937（昭和12）年、隣家からのもらい火により全焼したが、翌年、旧中山道を挟んで向かいの地で営業を再開。平成に入って閉業後、2012（平成24）年以降はNPO法人油やプロジェクトが「信濃追分文化磁場油や」として、かつて立原や堀辰雄が滞在した建物を拠点に文化・まちおこし活動を行っている。写真は、現在の「油や」前面の広場［写真：石田 篤］

テーマ1

立原道造が愛した浅間山麓で「田園的建築観」を想う

取材・文｜長井美暁
写真｜石田 篤（特記以外）

ナビゲーター｜種田元晴（文化学園大学造形学部建築・インテリア学科助教）

詩人として名高い立原道造は建築家でもあった異色の人で、東京帝国大学工学部建築学科を卒業後はわずかな期間だが、建築設計事務所に勤めていた。大学在学中の成績は優秀で、辰野賞を3年連続受賞。3度目の受賞作である卒業設計は、浅間山麓に構想した芸術家村の計画だった。

立原は大学時代から24歳で夭逝するまでの間に、浅間山麓の追分を何度も訪れている。追分の地に魅力を感じていたからだ。立原を惹き付けたものは何だったのか。『立原道造の夢みた建築』（鹿島出版会）の著書がある、文化学園大学造形学部建築・インテリア学科の種田元晴助教に追分を案内してもらいながら探った。

資料提供：立原道造の会

立原道造
たちはら・みちぞう

1914年、東京市日本橋区に生まれる。東京帝国大学工学部建築学科を卒業後、石本喜久治建築事務所に入所。1939（昭和14）年、第一回中原中也賞を受賞後、満24歳8カ月で逝去。略歴はp.09参照
［資料提供：立原道造の会］

01｜浅間山
追分宿南側の発地（ほっち）エリアから見た浅間山。長野県軽井沢町と御代田町（みよたまち）、群馬県嬬恋村との境にあり、標高2,568mの成層火山だ。火山活動の指数が高いとして気象庁はランクAの活火山に指定しており、2019年8月にも噴火があった［写真：小松正樹］

街道が左右に分かれるところを指す「追分」という地名は各地に残る。長野県北佐久郡軽井沢町追分もそのひとつ。ここでは江戸と京都を結ぶ中山道から、越後に通じる北国（ほっこく）街道が分岐する。

この一帯は中山道六十九次の追分宿（おいわけしゅく）として、江戸時代に大いに栄えた。同じく浅間山[01]の山麓の軽井沢宿、沓掛宿（くつかけしゅく）とともに「浅間根越の三宿」と呼ばれたなかで、追分宿が最もにぎわったという。なお、軽井沢宿は現在の旧軽井沢、沓掛宿は中軽井沢が該当する。

明治時代に入ると、浅間三宿は全国の宿場町と同様に寂れていった。しかし、よく知られるように、軽井沢は外国人宣教師によって避暑地として見出され、西洋人の別荘地として発展。また沓掛も大正期に、のちに西武グループを興す堤康次郎が別荘地として開発。戦後も軽井沢から沓掛にかけてはリゾート地として大規模な開発が進められた。

その開発の手が伸びなかったから、追分は静かで落ち着いている。「追分はいい意味で、時代が止まったままなんです」と種田元晴助教は言う。

追分での定宿

追分の旧中山道沿いには、かつて旅館だったと思われる出桁造りの建物や、それを模したファサードの建物が立ち、宿場町の面影を追うことができる。ここには立原道造が定宿とした「油屋」[02]があった。

油屋は元禄元年に創業し、江戸時代には脇本陣を務めた由緒ある旅籠だった。明治以降は森鷗外や島崎藤村が泊まった記録もあるが、どちらかというと庶民的な宿として存続。1909（明治42）年に国有鉄道の夏期臨時停車場として追分仮停車場が開業すると、夏の間は試験勉強のために学生たちが合宿するようにもなった。ちなみに、この仮停車場がのちに信濃追分駅となる。

立原道造は1934（昭和9）年、東京帝国大学工学部建築学科に入学した年の夏、旧軽井沢に滞在していた小説家の堀辰雄[03]に会うために、友人と浅間山麓を初めて訪れた。立原は3年前に面識を得てから堀を兄のように敬い、慕っていた。

このときに立原は、詩人で小説家の室生犀星[04]が軽井沢に建てた別荘（13ページ参照）も訪問し、その後、ひと月近く追分にとどまり、油屋にも泊まった。以降、油屋は立原の定宿となる。追分には街道の交点の宿場町として昔から他者を受け入れてきた寛容な風土があり、また、軽井沢のように多湿ではなく、過ごしやすい気候で、快適に滞在できたのだろう。立原は油屋から、堀や室生に会うために軽井沢によく出かけた。

油屋は1937（昭和12）年、隣家の出火により類焼。翌年、旧中山道を挟んで向かいの地に、豪農の建物を移築して営業を再開した。

一方、学生のころから毎年のように軽井沢に滞在していた堀も、以前からたびたび油屋に逗留し、執筆の場としていた。堀は学生だった立原に別荘の計画を考えさせたこともあったが、旧軽井沢・釜の沢地区に気に入った山荘を見つけた。それが「堀辰雄1412番山荘」（12ページ参照）だ。この山荘をどれだけよいと思っているか、友人たちによく話していたというから、立原も見たことがあるに違いない。

02｜信濃追分文化磁場油や（元・油屋）
上は現在の「油や」。右は焼失前、大正から昭和初期ごろの「油屋」。油屋再建の際、立原は室生や堀とともに資金援助を呼びかけ、亡くなる前年、上の写真の左側に写る本館に宿泊。右の写真では、かつての旅籠の特徴を備えた建物の様子がわかる。堀の代表作『菜穂子』に登場する「牡丹屋」という旅館はこの旧油屋がモデルだ。前面を貫くのは旧中山道［写真右所蔵：軽井沢町追分宿郷土館］

しかし、その山荘を入手して数年後、堀は疎開と療養のために、1944（昭和19）年から油屋の隣の家を借りて追分に定住。軽井沢より追分のほうが気候がよく、療養に向くということのほか、軽井沢より静かな環境もよかったのだろう。1951（昭和26）年には油屋の斜め前に建てた新居に移り、晩年を過ごした。その住まいは現在、「堀辰雄文学記念館」（18ページ参照）として公開されている。

このように立原とも堀とも縁の深い油屋は2000年代半ばごろまで営業していた。そして閉業後に売りに出されたところを、隣地で古書店「追分コロニー」[05]を営む斎藤尚宏氏がスポンサーを募って購入資金を集めた。2012（平成24）年以降は斎藤氏が立ち上げたNPO法人油やプロジェクトの運営により、「信濃追分文化磁場油や」（以下、油や）という文化活動の拠点となっている。

「追分には軽井沢とはまた異なる文化があります」と話す斎藤氏はもともと銀行員だった。50歳で退職後、追分に移住し、古書店を始めた。銀行員時代に駐在したニューヨークで、廃墟のまちだったソーホー地区に芸術家やデザイナーが移り住み、高感度なまちとして生まれ変わったことを知り、そのイメージを追分に重ねた。「追分も明治期に入って寂れ、忘れ去られたような村になっていたけれど、落ち着いた雰囲気が創作や思索に向くとして、立原や堀をはじめとする文士や知識人が油屋に集まり、文化的な気運が醸成されたのです」。

そんな追分を象徴する油屋が売りに出され、建物をどうするかは購入者に任せるという不動産業者の言葉を聞いたときは、「地域の大事な史跡を後世に残すために何とかしなければ」と即座に思ったという。そして銀行勤めの経験を活かし、提案書をまとめてスポンサーを探し、維持費をまかなうためにNPO法人を設立した。

「油や」は1938（昭和13）年に移築された木造の本館と1982（昭和57）年に建てられた鉄筋コンクリート造の新館からなる。かつての客室や浴場、厨房を利用し、1階にはさまざまなギャラリーが入居。追分を訪れた人々にアートや古本との出会いの場を提供している。また、2階は素泊まりの宿として整え、アーティスト・イン・レジデンスを行ったり、一般の宿泊客を受け入れたりしている。

裏庭には2018（平成30）年、「小さな小屋」を新設（10ページ参照）。「隠れ家プロジェクト」の一環で、立原の卒業設計「浅間山麓に位する芸術家コロニイの建築群」と、立原が描いた週末住宅「ヒアシンスハウス」のスケッチにアイデアを得ている。

立原は卒業設計でどのような構想を描いたのか。その前に彼の生い立ちを振り返ってみよう。

詩と建築の両立を目指して

立原は1914（大正3）年、東京市日本橋区橘町に生まれた。橘町は現在の東京都中央区東日本橋にあたる。この一帯は今も問屋街で、立原家は荷造り用の木箱や縄むしろを製造する商店を営んでいた。

立原は幼少期から身体が弱く、4歳から亡くなる直前まで、毎夏を避暑地で過ごした。最初は千葉・館山の那古（なご）海岸だったが、立原の健康には山のほうが適しているとの配慮から、10歳からの10年間は奥多摩の御岳山麓に移った。避暑地が海から山に変わったころから、クレヨン、鉛筆、水彩などによる風景画を多く描くようになる。

近くの久松尋常小学校を卒業後は東京府立第三中学校（のちの東京都立両国高等学校）に進学。中学時代は首席を貫くほど成績優秀だっただけではなく、部活動にも熱心で、博物部、音楽部、雑誌部、談話部、絵画部に所属。雑誌部では文才を、絵画

03｜堀 辰雄
小説家（1904－1953）。東京に生まれ、東京府立第三中学校から第一高等学校理科に進学するところまでは立原と同じだが、高校在学中に文学に目覚め、東京帝国大学文学部国文科に進学。軽井沢には19歳のときに室生犀星に連れられて来て以降、毎年のように訪れるようになり、軽井沢を舞台とする数々の作品を残した。1944年から追分に定住し、追分に建てた家で逝去

04｜室生犀星
詩人、小説家（1889－1962）。石川県金沢市に生まれる。裁判所や新聞社に勤めながら詩作を始め、『愛の詩集』『抒情小曲集』を発表し、抒情詩人として出発。のちに小説も発表。『性に眼覚める頃』『杏っ子』などが知られる

05｜追分コロニー
2006年の夏、斎藤尚宏氏と祐子夫人が開いた古書店。店名は立原の卒業設計に由来。追分で昔ながらの民家を復元したいと考えていた家主が、田舎に古書店を開きたいという斎藤夫妻の計画に賛同。その家主が建てた民家を借りて営業している［写真：小松正樹］

資料提供：立原道造の会

卒業設計スケッチ「Lodge and Cottages」、1937

広大な「芸術家コロニイ」を形成するひとつの集落を描いたものと考えられる。集落は、芸術家たちの交流の場となる中央のロッジと、その周囲に点在する複数の小さなアトリエ兼用住宅によって構成される［資料提供：立原道造の会］

06｜岸田日出刀

建築学者、建築家（1899－1966）。東京府立三中、一高二部甲類を経て、東京帝国大学工学部建築学科を卒業。1929（昭和4）年に東大教授に就任。戦前から戦後にかけて、建築設計意匠の権威だった。「東大安田講堂」「東大図書館」など東京大学内の施設を多く設計

07｜大江 宏

建築家（1913－1989）。成蹊高等学校から東京帝国大学工学部建築学科に進学。卒業後は文部省、三菱地所を経て、弟の透・修とともに大江建築事務所を設立。法政大学の建築教育にも尽力。「混在併存」の建築概念を提唱。主な作品に、一連の「法政大学」の校舎、「乃木神社」「国立能楽堂」など。父の大江新太郎、長男の新も建築家

種田助教は学生時代に立原の存在を知って興味をもち、情念豊かに表現された透視図の数々に惹かれた。また、幼少期より長野県北部の黒姫山麓にほぼ毎夏、東京から避暑に出かけていた経験もあり、「立原の追分への憧憬に親近感を抱いたことが、透視図とともに立原に着目したきっかけ」という［写真：編集室］

部では画才を発揮した。

勉学に秀でた立原は中学を飛び級で卒業し、17歳で旧制第一高等学校理科甲類の受験にも合格。高校入学当初は中学時代に続いて短歌に勤しんだが、やがて短歌から離れ、詩作を始める。そして中学時代に夢中で取り組んだパステル画も次第に描かなくなり、文学に専心するようになった。

1934（昭和9）年、一高を卒業し、東京帝国大学工学部建築学科に入学。進学後に立原は「詩では暮らせないから建築をやる、建築なら両立する」と同級の友人に語っている。

この言葉の真意について種田助教は、「幼少のころより言葉と絵に親しんだ立原は、建築を単に生計を立てる手段とは考えていなかったはずです。表現の欲求を言葉で満たす詩人としての半身と、絵によって満たす建築家としての半身を対等に持ち合わせ、この両者を同時に行き来する表現者であろうとしていたと思う」と話す。

当時の東京大学建築学科は岸田日出刀[06]が設計教育の流れを変え、立原は様式建築ではなく近代建築の規範を学んだ。そして、さまざまな設計課題に取り組み、3年連続で辰野賞の銅賞を受賞。現在は東京大学建築学科の卒業設計に与えられる辰野賞は当時、年度末に1年間の課題を振り返って上位数点を表彰し、最優秀作に銀賞、優秀作に銅賞を授与していた。なお、立原の1学年下だった丹下健三は卒業年次に1回のみ銅賞を受賞、また、丹下と同級で、立原の友人でもあった大江宏[07]は銅賞を2回受賞した。立原がいかに建築を意欲的に学び、その才に優れていたかがうかがえる。

大学時代の立原は建築を学ぶ一方で、堀や室生の指導を仰ぎ、詩人としても大きく成長する。そして、大学時代の重要なエピソードとして、追分との出合いがあった。追分を初めて訪ねた翌年、小学校の設計課題の敷地に浅間山麓を選ぶほど、立原はこの地に魅了されていた。

卒業設計は建築観の集大成

立原が描いた建築図面やスケッチは、筑摩書房から2009（平成21）年に刊行された『立原道造全集4』に網羅的に収録されている。それらを詳細に解読した種田助教は、「田園風景に建築を位置づけたものが都市を舞台とするものより多く、さらに、建物の外観を描いた透視図の多さが目立ちました。手描きの透視図には設計者の思い描く建築の姿、すなわち建築観が反映されます。立原は建築を風景の一部として見ていたのでしょう」と語る。

卒業設計スケッチ「Lodge and Cottages」（本ページ左上）に代表されるように、立原の外観透視図やスケッチは総じて視点の位置が高い。俯瞰図は建物の屋根形状を表せるだけではなく、周囲の状況も表現できるという特徴がある。

また、立原は添景に木々や山などの自然要素を生き生きと描いた。自然要素は量も種類も豊富で、その建物の周辺環境としてふさわしいものを選び、木々については幹の色や枝の伸び方、葉の形状などを忠実に描き分けている。たとえば卒業設計の一葉「集落内の一小住宅」（右ページ右上）では、建物をやや右に寄せて描き、それによって生まれた余白を活かして木々をたくさん描き込み、木の幹や枝葉が建物の手前に覆い被さるような構図で、建物が森のなかに埋没する様子を表現している。

「建築を取り巻く周囲の自然を緻密に描き、自然風景に溶け込んだ姿を建築のあるべき理想とする。そこには立原の田園志向の建築観がにじみ出ています。そして、そんな『田園的建築観』を成熟させた結果が卒業設計です」。

卒業設計は追分一帯で、文芸家や音楽家、美術家が創作と発表をしながら暮らす、壮大な芸術家村の計画だった。信濃追分駅前に公共施設や来客用の施設を整備し、その周囲に芸術家たちのための施設と住まいを分散させる。芸術家たちの住まいは牧歌的な小屋だ。小屋は一定の単位でまとめられ、周囲には木々を植える。芸術家たちが創作に専念できるよう、食事は集落の中央に立つロッジでふるまわれる。そうした小さな集落が自然のなかに点在し、追分の至るところで、さまざまな芸術家が思い思いの活動を展開するという構想だ。しかも田園にありながら、都市に準ずる機構がきちんと整備されていた。

種田助教は「立原は日常としての東京と非日常としての追分の往復という学生生活のなかで、浅間山麓・追分への憧憬の念と、都市から田園への逃避願望を培い、学んだ建築についての知見を最大限に活かした集大成として、具体的なリアリティをともなって浅間山麓・追分への憧憬を結実させたのです」と説く。

立原は卒業設計に次の主旨を書き添えた。

「本計画は　浅間山麓に　夢みた　ひとつの建築的幻想である。

優れた芸術家が集まつて　そこにひとつのコロニイを作り、この世の凡てのわづらひから高く遠く生活する、しかし　それは隠者の消極的な遁世の思ひではなく　寧ろ却て　低い地上の生活に　かがやかしい文化の光を投げかけようとする積極的な意欲から――。（後略）」。

「油や」の斎藤氏はこの文を「大胆」と評したうえで、「80年前によく構想できたものだと感心します。現代に通じる働き方や暮らし方のアイデアが盛り込まれている。共鳴する人も多いと思う。それで油やのまちおこしにそのアイデアを使わせてもらい、『隠れ家プロジェクト』を立ち上げたのです」と話す。

1937（昭和12）年、立原は大学を卒業し、石本喜久治建築事務所（現・石本建築事務所）に入所した。与えられた仕事に熱心に取り組み、徹夜もいとわなかったが、ビルの一室で仕事をするのは、いわく「硝子の牢屋」にいる気分になった。また、設計の実務は学生時代の設計課題と違い、表現の機会としてばかりでない側面がある。そのストレスを発散するかのように、詩集を編むなど自らの創作にも精を出したところ、半年が過ぎたころ、過労で倒れた。そこで自宅療養ののち、追分の油屋で予後を養おうとしたが、宿泊4日目に油屋が焼失。

追分の居場所を失った立原は、学生時代から何度か訪れた埼玉・浦和の別所沼のほとりに、自身の小別荘「ヒアシンスハウス」を構想し、具体的な設計図も描いた。

油屋が営業を再開した1938（昭和13）年、立原は休職し、東京大森の室生邸で療養ののち、油屋でも夏のひと月ほどを過ごして療養。その後、東北への旅に出て、九州への旅も強行した。その無理がたたって体調が悪化し、1939（昭和14）年3月、短くも濃い人生を閉じた。

「夢はいつもかへつて行つた　山の麓のさびしい村に」。これは「のちのおもひに」という立原の詩の一部で、「軽井沢高原文庫」の敷地内にある「立原道造詩碑」[08]に碑文として刻み込まれている。浅間山麓・追分への憧憬があふれんばかりだが、「立原は結局、追分に住んでいないんですよね。あくまでも都会人として追分に来ていた」と種田助教。

「立原の卒業設計は、追分につくった理想郷が世の中に光を与える、というもの。世の中には東京も含まれ、つまり追分への憧憬と表裏一体に、東京への慕情もあったと思います。立原の『田園的建築観』は、もともとその場所にあるものを、あるがままの姿を大切にしながら活かす、という方向性です。80年前の立原が、都市の飽和したいまの東京に向けて、これからの建築のあり方を示してくれているのです」。

その場所にあるものを活かす――。堀や室生の別荘を目にして、そして時代が止まったままの追分での生活で、立原はその建築観を見出していったのだろう。立原が示した方向性は、いまなお色あせることなく、多くの人の心を動かしている。

卒業設計「浅間山麓に位する芸術家コロニイの建築群」の一葉「集落内の一小住宅」、1937

卒業設計のこの小屋を写したような『ヒアシンスハウス』が構想されたことについて、種田助教は「卒業設計で描いた芸術家のための小屋に、立原自身も芸術家のひとりとして住みたくなったのでしょう」と語る［出典：『新建築』1940年4月号］

ヒアシンスハウス

埼玉県さいたま市の別所沼公園内に、2004年に建設された。さいたま市の政令指定都市移行にともない、別所沼公園が埼玉県からさいたま市に移管され、これを機に立原が夢見た「ヒアシンスハウス」建設の気運が高まり実現。曜日限定で内部を見学可能（外観はいつでも見学可能）［写真：種田元晴］

08｜立原道造詩碑（磯崎 新、1993）

軽井沢高原文庫の前庭に、1,000人弱の有志により建立。東京大学建築学科で立原の後輩にあたり、軽井沢とも関わりの深い建築家の磯崎新氏がデザインした。製図板の大きさや傾きを模した詩碑には、立原の自筆による「のちのおもひに」の冒頭部分が刻み込まれている。詩碑はチタン鋳造、台座はイタリア産の石

立原道造 略年表

1914（大正3）年
東京市日本橋区橋町（現・東京都中央区東日本橋）に生まれる。実家は荷造り用の木箱などを製造する商店

1927（昭和2）年
東京府立第三中学校（現・東京都立両国高等学校・付属中学校）に入学

1931（昭和6）年
府立三中を4年で修了し、第一高等学校理科甲類に入学。秋ごろ、堀辰雄の面識を得て、以降は兄事

1934（昭和9）年
第一高等学校を卒業し、東京帝国大学工学部建築学科に入学。7月、軽井沢を友人と初訪。追分油屋にも滞在

1935（昭和10）年
前年度の設計課題により辰野賞（銅賞）を受賞。7月～8月、追分滞在

1936（昭和11）年
前年度の設計課題により辰野賞（銅賞）を受賞。7月～8月、追分滞在

1937（昭和12）年
3月、卒業設計「浅間山麓に位する芸術家コロニイの建築群」を提出、3度目の辰野賞（銅賞）を受賞。大学卒業後は石本喜久治建築事務所（現・石本建築事務所）に入所。8月上旬、軽井沢に行き、追分油屋にも投宿。同月下旬、追分へ小旅行。9月上旬、追分に数日滞在。10月、肋膜炎で発熱し、自宅静養。11月中旬、追分油屋で静養。同月19日、油屋焼失。12月、浦和・別所沼のほとりに「ヒアシンスハウス」を計画

1938（昭和13）年
6月、恋人の水戸部アサイをともない浅間山麓に日帰り旅行。7月、石本事務所を休職。東京大森の室生犀星邸で留守番を兼ねて静養。8月、新築された追分油屋に転地。9月～10月、盛岡方面に旅行するが、結核による痔瘻の悪化のため帰京。11月～12月、奈良・京都や松江・出雲などを経て長崎方面に旅行するが、長崎で体調を崩して入院後、帰京。12月中旬、東大病院で受診、絶対安静を命じられる

1939（昭和14）年
2月、第一回中原中也賞を受賞。3月29日、満24歳8カ月で永眠

種田元晴　たねだ・もとはる
文化学園大学助教／1982年東京都生まれ。2005年法政大学工学部建築学科卒業。2012年同大学大学院博士課程修了。博士（工学）。一級建築士。東洋大学ライフデザイン学部人間環境デザイン学科助手、種田建築研究所などを経て、2019年より現職。専門分野は建築史・意匠、図形科学。法政大学国際文化学部兼任講師。

長井美暁　ながい・みあき
編集者、ライター／山形県出身。日本女子大学家政学部住居学科卒業後、『室内』編集部に所属。2006年よりフリーランス。

MAP 1
04

隠れ家プロジェクト
小さな小屋

2018年

設計｜広瀬 毅

立原が理想とした暮らし方を現代に

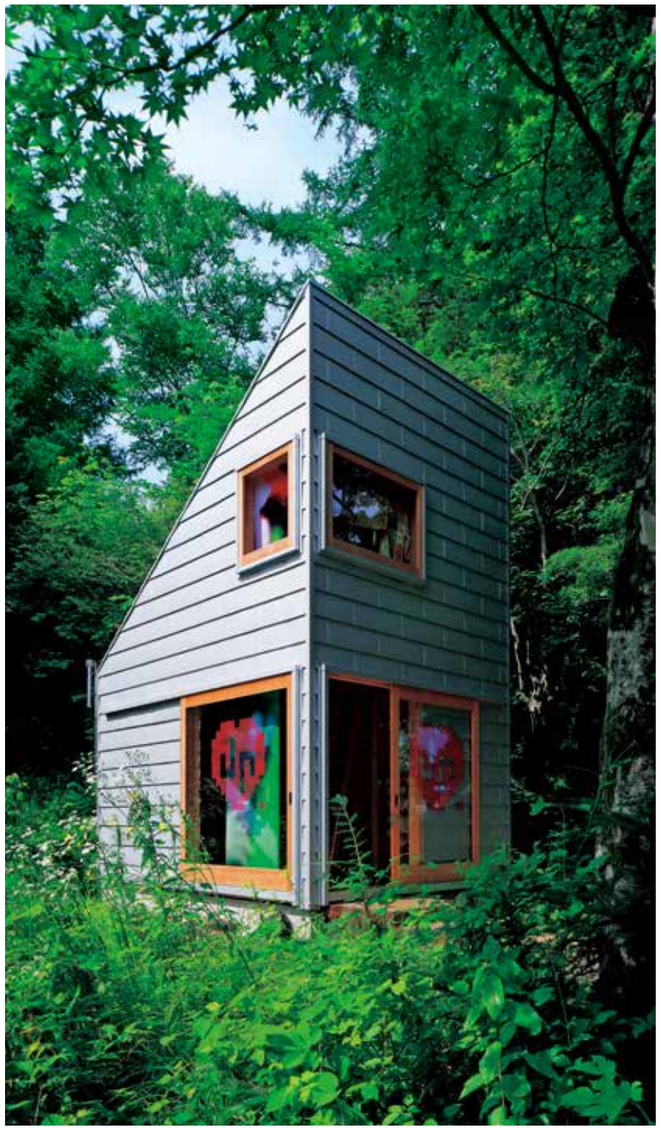
文化活動によるまちおこしを進めるNPO法人油やプロジェクトが拠点とする「信濃追分文化磁場油や」の敷地内、元油屋旅館の裏庭につくられた小屋。延床面積は10㎡に満たない。立原道造の「芸術家コロニイ構想」に描かれたスケッチ「Lodge and Cottages」をもとに、また、立原が埼玉・浦和の別所沼のほとりに計画した小さな週末住宅「ヒアシンスハウス」のスケッチも参考に設計された。

「油や」は2017年にアーティスト・イン・レジデンスを開始。アート作家にとって信濃追分の地が創作活動に適した環境であることを発信したいと考え、地域の魅力や特性をアピールするシンボルとして、立原が構想した「小さな小屋」のインスタレーション作品を設置した。

「小さな小屋」はアート作家の作業場、作品の展示場所、瞑想空間などの隠れ家として活用される。「油や」はこれを皮切りに、「隠れ家プロジェクト」として「小さな小屋」を複数設置していく計画だ。小屋は1棟ごとにデザインに個性をもたせ、造形性の高いものを目指したいという。

自然豊かな場所にシンプルライフを実現する小屋をもつ。そうした暮らしに憧れる人が増える昨今、立原が思い描いた暮らし方があらためて注目される。

1 長野市を拠点とする建築家の広瀬毅氏が基本設計を手がけた
2 旧旅館の廊下を活かし、「油や回廊」と名づけられた本館1階のギャラリー。写真右手のテナントスペースは、もとは大広間だった。戦前に建てられた本館は傷みがかなりあったが、少しずつ修理して今の姿に再生
3 堀辰雄が執筆に使っていた本館2階の角部屋


1

2

3

追分の山荘

1961–1962年

設計｜大江 宏

友人・立原へのオマージュを感じる共通点

山荘は、建築家の大江宏が一家で過ごすための母屋と、事務所の所員たちと親睦を深めたり、学生たちとゼミ合宿を行ったりするための寮からなる。寮は20人ほどが泊まれる北側の切妻棟と、皆が集まって議論や食事ができる南側の方形棟が連続する。母屋が比較的平らな地面に立つのに対し、寮は斜面地に立ち、細い柱で床を持ち上げたピロティ形式だ。

大江が父・新太郎の没後に、この土地を弟2人とともに求めたのは1935（昭和10）年。その前から追分にはよく出かけ、油屋の数軒隣の雑貨店（亀田屋）に宿泊。油屋で宿泊者たちと語り合う機会も多く、そのなかで立原道造との親交を深めた。

大江は晩年、立原の卒業設計について、「立原はこの土地を仮想の敷地にした」という旨の言葉を遺した。さらに興味深いことに、「立原が卒業設計のスケッチに描いたロッジ部分と、この山荘の寮棟には共通点がいくつか見られます」と種田助教。たとえば、切妻と寄棟による2つの大きな屋根と、その間の小さな切妻屋根。棟全体を持ち上げる細い柱群。中央に設けた階段を経てのアプローチ。寄棟屋根側に伸びる角柱形の煙突。建物正面のピロティ状のテラスと、その手すり。立原が卒業設計で掲げた理念への共感が、大江にこの寮棟を設計させたのだろうか。

1

2

1 立原道造が描いた卒業設計スケッチ「Lodge and Cottages」のロッジ部分（抜粋）［資料提供：立原道造の会］
2 母屋は1961（昭和36）年に竣工。寮棟が竣工したのはその1年半後［写真：種田元晴］
3 寮棟。左の切妻棟が宿泊スペース、右の方形棟が集会スペース。中央に出入り口があり、3種の屋根が折り重なる。方形棟は大江らしい繊細な柱によって床が浮遊する［写真：種田元晴］

3

MAP 3
21

堀辰雄1412番山荘

明治末期の作と推測（1985年に現在地に移築）

設計｜不詳

堀辰雄が愛したバンガロー形式の別荘

もとはアメリカ人の別荘で、旧軽井沢・釜の沢地区にあった1412番山荘だ。小説家の堀辰雄は付近を散策するなかでこの別荘を見つけ、外から眺めては住みたいと切望。代表作『美しい村』の舞台となったサナトリウム近くにあった。念願かなって堀は1941（昭和16）年に入手。しかし肺結核の悪化により、この山荘での生活を楽しめたのはわずか4年間だった。

1953（昭和28）年に堀が亡くなった後は、ともに洋画家だった深沢省三・紅子夫妻が堀夫人から借りて、夏のアトリエとして1963（昭和38）年ごろから1983（昭和58）年ごろまで使用。その後、堀夫人が軽井沢高原文庫に建物を寄贈し、1985（昭和60）年、「軽井沢高原文庫」内の現在地に移築された。

建物は20世紀初頭のアメリカの典型的なバンガロー形式の平屋で、居間側にベランダが張り出している。建築史家の藤森照信氏は著書のなかで、「おそらく一番魅せられたのはベランダのつくりに違いない」と記す。建物全体の構造は落葉松を主材とし、切妻屋根で、軽井沢初期の別荘の代表的なつくりだ。外壁は杉皮張り、内壁は板張り、居間の中央には自然石を積んだ煖炉が置かれ、素焼きの土管の煙突が屋根へと伸びる。天井を張らず、落葉松の丸太の梁や小屋組が剥き出しの素朴なつくりだが、堀はその素朴さを愛した。

1

2

3

1　板張りで簡素な仕上げの居間。玄関はなく、ベランダから直接入る。アンペラという植物の茎を編んだ筵（むしろ）を壁の上部に張り、風通しをよくしている
2　出入り口の脇に、板切れと枝で設えられた小さなカウンター
3　自然石を積んだ煖炉。軽井沢初期の別荘では夏も煖炉を使っていたという
4　居間側に張り出したベランダの手すりは白樺の枝

4

MAP 4
23

室生犀星記念館

1931年

設計｜不詳

文士たちの交流の場だった「こおろぎ箱」

詩人で小説家の室生犀星が建てた別荘。母屋と書斎、離れの3棟がある。室生は亡くなる前年の1961（昭和36）年まで、毎夏をここで過ごした。現在は軽井沢町が所有・管理し、記念館として一般公開している。

3棟はいずれも純和風で、礎石の上に柱を立てた石場建て、外壁は杉皮張り、屋根は当時は柿葺き。内部に目を向けると、母屋の床板は白欅、書斎の床柱は百日紅、床框は黒柿という具合に風趣に富む木材を用いている。また、離れの三畳間はあえて不祝儀敷き（すべて同じ方向に畳を並べる）にして、真ん中の畳の端に床の間を設けるなど、“通な”しつらえが随所に見られる。

室生が「こおろぎ箱」と呼んだこの別荘には、立原や堀をはじめ多くの文士が集まり、にぎやかだった。立原は朝早くに追分を出て、1時間かけてやって来ていた。そのため到着すると、庭に置いてあった雨ざらしの木の椅子に腰を下ろし、「大概の日は、眼をつむって憩（やす）んでいた」と室生は書いている。

廃材でつくった離れ。3部屋ある。炉を切った部屋はないが、茶室として建てられた。庭に対して並々ならぬ思いがある室生は、苔の生育に向いているとしてこの敷地を選んだ。4本並んで立つモミジの枝葉が一種の“屋根”となって木漏れ日を生み、それが苔には適した日照となる。室生が自ら築いた庭は晩年まで毎年、その形を変えていたという

左から書斎、母屋、離れ。立原がよく休んでいた木の椅子は、書斎と母屋の間の庭に置かれていたという。母屋の縁側の玄関寄りの端が室生のお気に入りで、苔庭越しに離れが最もきれいに見える。竣工当時の屋根には木曽産のサワラ材を手割りした柿板が葺かれていた。2018年10月から2019年7月に行われた保存修復工事ではその柿板を残して、鉄板から銅板に葺き替えられた

テーマ2

地域にとって大切な建物の価値を「ブルー・プラーク」で後世に伝える

取材・文｜磯 達雄
写真｜小松正樹

1 建築家、アントニン・レーモンドの別荘として1933年に建てられた「夏の家」と、その前に掲示されたブルー・プラーク。レジャー施設「軽井沢タリアセン」の敷地内に移築され、「ペイネ美術館」として公開されている
2 「田崎美術館」の内部に掲示されたブルー・プラーク。建物は原広司氏による設計で1986年に完成。竣工してから30年余りしか経ていないこうした建物も認定を受けている
3 「睡鳩荘」の前に掲示されたブルー・プラーク。建物は三越や帝国生命の社長を務めた実業家、朝吹常吉の別荘として1931年に建てられたもので、設計はウィリアム・メレル・ヴォーリズによる。「レーモンド夏の家」と同じく「軽井沢タリアセン」内に移築されている

英国を旅行した人なら、建物に付いている円形の銘板を目にした記憶があるだろう。多くは青地で「ここにジョン・レノンが住んでいた」などと書かれている。これがブルー・プラークだ。これを参考にした制度が、軽井沢町でも2016（平成28）年から始まった。制度の狙いや運用方法などについて、担当する軽井沢町教育委員会生涯学習課文化振興係の島田尚美氏に聞いた。

軽井沢のまちや別荘地を歩いていると、ときおり建物の前に円盤状の銘板が付いていることに気づく。これはすぐれた建築作品や著名人にゆかりのある家、歴史的に重要な出来事に関連した建物に付けられる「軽井沢ブルー・プラーク」だ。軽井沢町が選定し、建物の所有者の協力で設置してもらっている。

「ブルー・プラーク」という名称や銘板のデザインは、英国で広まっている制度を参考にしている。銘板はステンレス製で直径30㎝。青い円の中に、建物名、建築年と短い解説文が記されている。加えて、建物が別荘の場合は、別荘ごとに割り振られた別荘番号も入る。軽井沢で独自に発展した別荘の文化が強調されている。

この制度は2016（平成26）年に始まり、これまでに80件ほどが認定されている。物件の調査など補助業務については、一般社団法人軽井沢ナショナルトラストが委託を受けて行っている。認定に際しては、建物の所有者に承諾を得ることを条件とし、最終的な決定については教育委員会で判断している。認定が決まったら銘板を製作して、年度ごとに銘板の贈呈式を行う。なお、認定された建物に対して、修理の助成や税の減免といった優遇措置はいまのところない。

オーナーが替わっても建物の重要性が伝わるように

軽井沢ブルー・プラークの制度を始めた理由は何か。軽井沢町教育委員会生涯学習課文化振興係の島田尚美氏はこう語る。

「軽井沢では、建物の建て替えがどんどん進んでいます。それによって壊される建物には、実はまちの歴史において重要なものも少なくありません。建物が建てられた当時の所有者には、当然ながらそれが重要なものだという認識があります。しかし、年月がたつにつれ、持ち主が替わっていくと、その建物の重要性が伝わらず、引き継いだ方があっさりと建て替えてしまう。そうした事情によって、貴重な建物が次々と失われていく状況に対して、まちとして何かできないかと考えた結果のひとつが、この軽井沢ブルー・プラークという方策でした。銘板が付いていれば、持ち主が替わっても、その建物の由来は伝わっていくはずです」。

3

1

2

軽井沢には著名な芸術家、音楽家、政治家、財界人などが古くから別荘を構えてきた。別荘のオーナーたちは、それぞれの趣向を反映させた別荘建築を設けるとともに、お互いの別荘を訪ねたりしながら、東京では得がたい親密な交流をこの地で育んできた。そうした歴史上の重要な出来事の舞台となった建物が軽井沢には数多く存在する。軽井沢ブルー・プラークは、そうした地域だからこそ、創設された制度といえる。

文化財より広い範囲をカバー新しい建物や改築物件も

建物を残していくための制度には、国や各地方公共団体が指定する文化財や登録有形文化財の制度がある。軽井沢ブルー・プラークの認定物件には文化財としてすでに指定や登録を受けている建物も含まれている。それらの制度との違いはどんなところにあるのだろうか。

「たとえば国の登録文化財に登録できるのは、築後50年以上を経た建物です。そうなるであろう建物でも、40年目に壊されてしまうかもしれません。軽井沢ブルー・プラークにはそうした築年数の条件がないので、登録有形文化財になる前の建物も認定しておくことができます」。

また、大幅に改築されてしまうと文化財として認められるのは難しいが、軽井沢ブルー・プラークではそうした改変を受けた建物も積極的に認定している。

「文化財としての価値があるものは文化財で守ればいいのですが、それでは保護できないものもあります。そうした建物もカバーしていこうというのがこの制度の趣旨です」。

軽井沢で残したい建物には、やはり別荘が多い。しかしこれを軽井沢ブルー・プラークで認定するには難しい面もある。建物の外に銘板を掲げることによって、見ず知らずの第三者が建物を見に来てしまう懸念があるためだ。別荘で静かに過ごしたいというオーナーにとって、それは避けたい事態である。だから自分の別荘がそれに認定されるのは承諾できないという別荘オーナーも多くいるという。

「そのあたりは理解が得られたものからやっていくしかありません。私たちも人が大勢訪れて観光地と化すのは望んでいません。別荘地は別荘地のまま静かな環境で続いてほしいのです」。

軽井沢を歩いているとふとしたところで出くわす青い目印。これが50年後、100年後までこのまちの魅力を守ってくれる力になるか。その効果に期待したい。

軽井沢ブルー・プラーク認定基準

［選定基準］
1–1. 軽井沢町にゆかりがあり、古くから大切に保存・活用され、町内外の方々に愛されてきた建物
1–2. 所有者、滞在者、建築家、施工者のいずれかが著名な人物であるもの
1–3. 歴史的なエピソードをもつ建物、文芸作品などのモデルとなった建物
1–4. 軽井沢の町並みの形成に大きく寄与してきた建物
1–5. 人的交流、文化形成、スポーツ振興などに貢献した建物

［付帯条件］
2–1. 改築、復元新築されていても面影が残されていれば可
2–2. 公共施設、文化邸宅、個人別荘、商業施設、造成物のいずれもが対象

※上記のいずれかの基準にあてはまる建造物を選定する。建築後何年などの縛りは設けず、町に残していくべき建造物を選定する。

磯 達雄　いそ・たつお
建築ジャーナリスト／1963年埼玉県生まれ。1988年名古屋大学工学部建築学科卒業。1988–1999年日経アーキテクチュア編集部に勤務。2002年よりフリックスタジオ共同主宰。現在、桑沢デザイン研究所および武蔵野美術大学非常勤講師。

信濃追分・軽井沢建築めぐり

SHINANO OIWAKE・KARUIZAWA

旧軽井沢、中軽井沢、信濃追分はそれぞれ中山道の宿場街、軽井沢宿、沓掛宿、追分宿として栄えてきた地域だった。明治期に入って寂れていたが、外国人宣教師らに見出され、避暑地として復活を遂げた。特に旧軽井沢では一部の本陣（大名宿）や旅籠は西洋人客を迎え入れ、やがてホテルに発展し、一部は移築され別荘として生まれ変わった。多くの外国人、のちに日本の各界の人物も別荘を建設し、建築家の名作も多い。大正期からは別荘地開発も盛んになり、旧軽井沢、中軽井沢は有数の避暑地として注目されてきた。

一方その先の信濃追分は開発の手が少し遅れ、廃業した旧旅籠などが残る地域であった。そのため下宿先として学生を招いたこともあり、大学生や若き文士の勉学の村として知られるようになる。今回は彼らに縁のある地域や建築に注目すべく、信濃追分を中心に建築を巡る。文士たちが宿泊した油屋（再建）をはじめ、自邸や別荘などが公開されている。遺すことが難しい別荘だが、移築保存も進められていて、塩沢湖近くの軽井沢高原文庫には堀辰雄の山荘をはじめ数軒現存する。

追分の中心地からは少し離れるが、「ドメイヌ・ドゥ・ミクニ」のほど近くには「千ヶ滝用水路」の下ゼキが流れている。その一帯は温水路と呼ばれており、散策するには、うってつけだ。

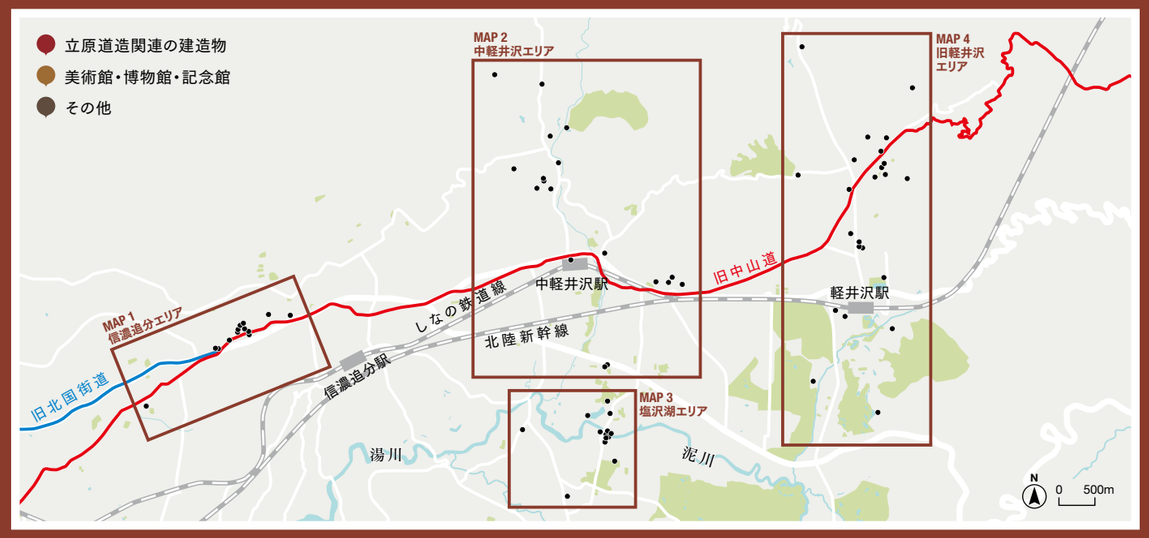
写真｜小松正樹（特記以外）

参考

- 大藤敏行・青山達夫『軽井沢と文学：軽井沢文学ガイド』軽井沢高原文庫、1992
- 軽井沢町追分宿郷土館『信濃国中山道・北国街道往還：歴史と文学を訪ねて 追分宿散策マップ』軽井沢町教育委員会、2009
- 軽井沢町追分宿郷土館『常設展示図録：軽井沢町追分宿郷土館』軽井沢町教育委員会、2005
- 宍戸 實『軽井沢別荘史：避暑地百年の歩み』（住まい学大系003）住まいの図書館出版局、1987
- 立原道造記念館研究資料室『立原道造と生田勉：建築へのメッセージ』立原道造記念館、1998
- 立原道造記念館研究資料室『「優しき歌」の世界：立原道造と水戸部アサイ』立原道造記念館、1999
- 藤森照信『信州の西洋館』信濃毎日新聞社、1995
- 堀辰雄文学記念館『堀辰雄文学記念館常設展示図録』軽井沢町教育委員会、2019

おことわり

04–21ページの作品名称は文化財指定名称とし、ほかは原則として2019年5月時点の施設名称を使用しています。



01
ドメイヌ・ドゥ・ミクニ
設計｜坂倉アトリエ
原設計｜坂倉準三
竣工｜1941年
移築・復原｜2007年
軽井沢町追分小田井道下46–13
静謐な別荘地に立つフランス料理レストラン。長手方向に架けられた切妻の大屋根、薄く・深く持ち出した庇、大開口をもつ建物は、パリ万博で成功をおさめた坂倉準三が、帰国後国内で最初に手がけた東京・世田谷の「飯箸邸」を移築・復原したもの。克明な実測調査を行い、可能な限り現存する姿の復原が目指された。下に山形を描いた換気窓は、切り出した現物が取り付けられている。一時は取り壊しの危機に瀕した建物だが、関係者の尽力により新たな命が吹き込まれた。日本におけるDOCOMOMO選

02
追分の分去れ（わかさ）
軽井沢町追分558
北国街道（ほっこくかいどう）と中山道（なかせんどう）の分岐点を指す。石柱、灯篭、歌碑などで構成されており、分去れの句碑が立つ。江戸から来た場合、右に辿れば北国街道の更科や越後方面へ、左は中山道で、奈良・京都（吉野）などの西へと通じる。追分宿は、参勤交代時に西国の諸大名が投宿したため、中山道六十九次の宿駅のなかで、最も栄えた宿のひとつであった。町指定文化財

03
追分公民館
設計｜武 基雄
竣工｜1995年
軽井沢町追分523
立原道造とは石本喜久治建築事務所（現・石本建築事務所）の同僚で、追分に別荘があった武基雄の設計。建設費は、追分区の住民と、追分に別荘をもつ人々との交流会「追分会」とで賄い、毎年夏にはこの施設で親睦会を開くなど、住民と別荘民との交流は長く深い。「追分は2つの街道が交わるハブ。文士や学生などいろいろな人が出入りしてきた、人を選ばない土地なんです」と、菅原恭彦区長と佐藤寛副区長は語る。玄関脇の壁には、立原の肖像と詩を刻んだレリーフがはめ込まれている

04
▶p.10参照
隠れ家プロジェクト
「小さな小屋」
設計｜広瀬 毅
竣工｜2018年
軽井沢町追分607

05
▶p.07、10参照
信濃追分文化磁場油や
設計｜不詳
再建｜1938年
改修｜2016年
軽井沢町追分607

06
▶p.07参照
追分コロニー
設計｜松井良一／始原社
竣工｜2006年
軽井沢町追分612

07
堀辰雄文学記念館
設計｜トータルメディア開発研究所（管理棟）、不詳（旧堀辰雄邸・展示室・書庫）
竣工｜1993年（管理棟）、1951年（旧堀辰雄邸）、1973年（展示室）、1953年（書庫）
軽井沢町追分662
作家・堀辰雄が新築し、1953年に逝去するまで暮らした家（写真下・左）を中心とした記念館。敷地内には、蔵書の並べ方を妻・多恵に指示したという書庫（写真右）、辰雄没後に多恵夫人が建てて夏を過ごした家（現・展示室／写真下・右）、管理棟が立つ。辰雄が初めて追分を訪れたのは、1925年の芥川龍之介らとのドライブの折。以来、たびたび訪れるようになり、戦争が激化した1944年から没するまで追分に定住した。自邸には自身がデザインした机や椅子が並ぶ

08
セゾン現代美術館
設計｜菊竹清訓建築設計事務所
竣工｜1981年
軽井沢町長倉芹ケ沢2140
東京・高輪の「高輪美術館」を前身とした、現代美術を対象に設立された美術館。展示だけでなく、さまざまな実験の場となるよう、展示スペース相互の組合せで多様な動線が確保できるよう計画されている。銅板一文字葺きの屋根、トップライトやガラス壁から外光を大胆に取り込んだ展示サロン、また敷地の起伏に応じた建物構成も特徴で、エントランス広場の芝生スロープは2階レベルまでつづく。野外彫刻が常設された小川が流れる庭園も見どころ。軽井沢ブルー・プラーク認定

09
星野温泉 トンボの湯
建築設計｜東 環境・建築研究所／東利恵
ランドスケープ｜オンサイト計画設計事務所
竣工｜2002年
軽井沢町星野
1915年に開湯した星野温泉の歴史を汲む日帰り入浴施設。湯は源泉掛け流し。受付が入る門屋の奥に、女湯と男湯の建物が立つ。その間には上池と下池からつづく水路が設けられ、宿場町の街道を意識した柱廊でつながる。隣接するレストラン「村民食堂」との間は、起伏のある広場で結ばれ、軽井沢星野エリアの中心にふさわしい、一体的なエリアを形成している

10
軽井沢星野エリア ハルニレテラス
建築設計｜東 環境・建築研究所／東利恵
ランドスケープ｜オンサイト計画設計事務所
竣工｜2009年
軽井沢町星野
星野エリアを流れる湯川に沿うように建てられた9棟からなる商業ゾーンで、トンボの湯・村民食堂エリアとは川沿いの遊歩道で結ばれている。敷地に自生した100本ほどの春楡を残して棟を配置。棟と棟の間に、いくつもの小広場（デッキ）を挿入し、設計者が「森に浮かんだ小さな都市広場」と呼ぶ変化に富んだ空間を構成している。デッキは鉄骨造とし、スパンを飛ばして春楡の根にダメージを与えないよう設計されている。2013年土木学会デザイン賞最優秀賞受賞

11
▶p.14参照
田崎美術館
設計｜原広司＋都市・建築計画センター・ベーシック アトリエ・ファイ建築研究所
竣工｜1986年
軽井沢町長倉横吹2141–279
文化勲章受章画家、故・田崎廣助の作品を常設展示。自然光のもとで作品を鑑賞することを最良と考えた田崎氏の意向をふまえ、さまざまな角度から自然光を取り入れ、人工照明に頼らない展示空間をもつ。特徴的なガラス屋根は、夏季のみの開館という条件から、冬場の結露問題が生じないため可能となった。林立する細い柱、内外に貫入するガラス壁、銀とグレーを基調にした多様な素材使いなど、多様な要素が重なり合う。軽井沢ブルー・プラーク認定、1986年日本建築学会賞受賞

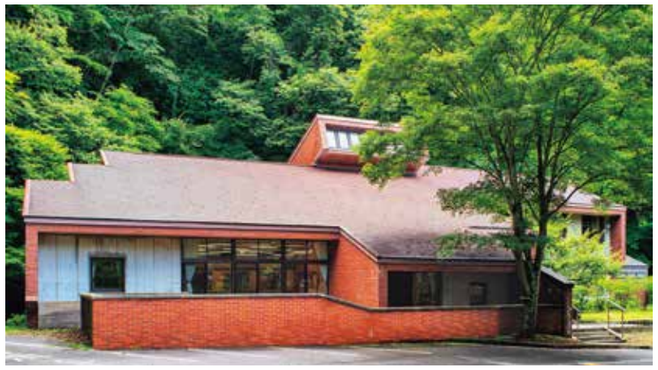
12
旧近衛文麿別荘（市村記念館）
設計｜あめりか屋
竣工｜1918年
移築・復原｜1997年
軽井沢町長倉2112－21

設計は、軽井沢で別荘建築を数多く手がけた洋風住宅建築会社「あめりか屋」。1926年に近衛文麿が別荘として購入後、近衛と親交のあった政治学者の市村今朝蔵が購入。翌年、軽井沢・南原に移築され、市村夫妻の研究活動・交流の場として長らく使用された。1997年に現在地に移築・復原後、軽井沢町に寄贈され、1999年に記念館として開館。往時の別荘建築を知る貴重な建物。軽井沢ブルー・プラーク認定、軽井沢町文化財

13

軽井沢町立
離山図書館
設計｜三輪正弘環境造形研究所
竣工｜1976年
軽井沢町長倉2112–118

軽井沢町出身の政治学者・市村今朝蔵の遺志とそれを継いだ遺族の寄付をもとにつくられた町立図書館。設計は、『新建築』編集長を務め、RIA建築綜合研究所（現・アール・アイ・エー）設立のコアメンバーだった三輪正弘。三輪は、各地で別荘を手がけたが、最も多いのが軽井沢だった。敷地は落葉松林に囲まれた台地。その斜面に食い込むような配置計画とし、内外をつなぐ要素として設けられたトップライトが目を引く



14

軽井沢千住博美術館
設計｜西沢立衛建築設計事務所
竣工｜2011年
増築｜2013年
軽井沢町長倉815
日本画家・千住博の作品を収蔵・展示。「明るく開放的に、今までなかったような美術館に」という千住氏の要望をもとに、起伏のある敷地を活かして建物を配置。傾斜した床、不定形な平面をもち、館内に挿入された4つの中庭から自然光を取り込んでいる。増築された千住博の代表作「The Fall」を収蔵する「The Fall room」は、自然光が満ちた美術館から一転。暗く傾斜した通路を下った先に、「The Fall」の鑑賞にふさわしい、光をしぼりこんだ静謐な空間が広がる［写真右：阿野太一 ©軽井沢千住博美術館／写真下提供：軽井沢千住博美術館］

15

軽井沢千住博美術館 カフェ・ショップ棟
設計｜安井秀夫アトリエ
竣工｜2011年
軽井沢町長倉815
軽井沢千住博美術館の付帯施設で、カフェ、スーベニアショップ、事務所からなる建物。日本の伝統芸術・折り紙をモチーフに、鉄骨鋼管で三角形の平面を構成し、屋根と壁とが一体となったような、直線的で幾何学的なデザインが特徴。遠くにのぞむ、八ヶ岳の稜線との一体感が意識されている［写真提供：軽井沢千住博美術館］

16

ルヴァン美術館
原設計｜西村伊作
竣工｜1997年
軽井沢町長倉957–10

1921年に西村伊作が創立・設計した文化学院の姿をほぼ再現して開館した美術館。「美の教育のためには美しい学校をつくらなくてはならない」という伊作の考えのもと、校舎は英国のコテージ風で、白壁に大きな破風、煖炉、屋根の上の風見鶏、美しい庭園をもつ当時の学校校舎のイメージを覆すものだったが、関東大震災により全焼。学院の教育思想を現代に伝えるべく、残された絵や写真をもとに建物が再現された。敷地内には、アトリエと庭園をのぞむカフェもある。軽井沢ブルー・プラーク認定

17

▶p.14参照

ペイネ美術館（A.レーモンド「夏の家」）
設計｜アントニン・レーモンド
竣工｜1933年
移築・復原｜1986年
軽井沢町長倉217
レーモンド自身の別荘兼アトリエ。取り壊しの危機に瀕したところを移築し、美術館施設として活用されている。主室と特徴的なバタフライ形の屋根のデザインなどが、ル・コルビュジエが1930年に発表したエラズリス邸の計画案と酷似していたため、両者の間で論争となるが後日和解。「私のデザインの上で新時代を画す建物が軽井沢の自分の夏の家であった」（『自伝 アントニン・レーモンド』三沢浩訳、鹿島出版会、2007）と語る。移築に際して、高さ1mのコンクリート基礎は復元せず、建物の南北の向きも逆になっている。軽井沢ブルー・プラーク認定

18

▶p.15参照

睡鳩荘（すいきゅうそう）（旧朝吹山荘）
設計｜ウィリアム・メレル・ヴォーリズ
竣工｜1931年
移築・復原｜2008年
軽井沢町長倉217

実業家・朝吹常吉の別荘として建てられ、その後、常吉の長女でフランス文学者として知られる朝吹登水子が夏場を過ごすための山荘として使用した建物。2008年に旧軽井沢から塩沢湖畔の軽井沢タリアセン内に移築・復原。1階に大きくとられたサロンには、軽井沢の別荘建築には欠かせない煖炉が配されている。勾配をゆるくとった中折れ階段は、ヴォーリズ建築の特徴。軽井沢ブルー・プラーク認定、登録有形文化財

19

▶p.09参照

立原道造詩碑
設計｜磯崎 新
完成｜1993年
軽井沢町長倉202–3

20

軽井沢高原文庫
設計｜GK設計
竣工｜1985年
軽井沢町長倉202–3
堀辰雄、室生犀星をはじめとする軽井沢にゆかりのある近代文学者の資料を展示・紹介する文学館で、軽井沢タリアセン内にある。斜面敷地を利用して人工地盤を設け、その上に2階展示室を載せ、基壇や1階の壁には、地産の浅間石を採用している。建物内に人工的な空調設備は設けず、上部と下部の開口によって採光と自然換気を行っているのも特徴。建物を抜けた裏手に、堀辰雄1412番山荘が立つ。軽井沢ブルー・プラーク認定［写真：石田 篤］

21

▶p.12参照

堀辰雄1412番山荘
設計｜不詳
竣工｜明治末期の作と推測
移築｜1985年
軽井沢町長倉202–3

22

軽井沢発地市庭（ほっちいちば）
設計｜宮本忠長建築設計事務所
竣工｜2016年
軽井沢町発地2564–1
南軽井沢エリアの観光振興拠点として計画された農産物直売施設で、開店と同時にシェフや地元客、観光客で賑わう。設計は、長野に拠点を置く宮本忠長建築設計事務所が手がけた。うねりのある屋根、軽井沢の森をイメージした外部のランダムな列柱によって、周囲の山並みと調和した外観を形成している。農産物売り場は、トラス構造の現しとした無柱の開放的な空間で、内外装には地域産の落葉松や浅間石を採用。施設各所に浅間山を眺めながら休憩できる場所が設けられている

23

▶p.13参照

室生犀星記念館
設計｜不詳
竣工｜1931年
軽井沢町軽井沢979–3